

日本語音声教育における聴取の難易度*

－ 韓国人学習者のレベル別聞き取り判断を中心に －

李 香 蘭**

(e-mail: ran96@wonkwang.ac.kr)

目 次

1. はじめに	3.2 特殊拍の聴取率
2. 研究方法	3.3 母音の無声化の聴取率
2.1 調査対象	3.4 「ン+ラ行音」の聴取率
2.2 調査方法	3.5 「ザ行音」の聴取率
2.3 聴取材料	4. 聴取の難易度
3. 調査結果	5. おわりに
3.1 アクセントの聴取率	

1. はじめに

拙稿(2010)¹⁾で、一般に言われている韓国人学習者が習得困難な日本語の音声項目(外来語・固有語アクセント、特殊拍、母音の無声音化、ン+ラ行音、ザ行音)を取りあげ、発音の傾向(問題点)について実態調査を行ない、日本語のレベルによってそれぞれの音声項目がどれぐらいの差があるのか、また、これらの発音問題の難易度を調べた。しかし、これらの音声項目は学習者が実際、発音する場合と聞き取りをする場合、難易度の面で違いが出てくると予想される。

そこで、本稿では発音の難易度の調査で取り扱った同じ音声項目や対象者を用いて、学習者の聴取の正確度や日本語のレベル間の差を分析・検討してみる。さらに、拙稿(2010)の結果である、学習者の発音問題の難易度とも比較して、今後韓国人日本語学習者の

* 本研究は圓光大学2009年度、校内研究費の支援によって助成されたものである。

** 圓光大学、教授(日本語音声教育専攻)

1) 『日本語教育』第54輯、韓国日本語教育学会、PP.13-24。

発音教育における指導方案の手がかりにしたい。

2. 研究方法

2.1 調査対象

調査対象は円光大学日本語教育学科1年生から4年生のうち、初級レベルに当たる学生6名(6人とも日本の滞在経験がなく、高校で日本語の学習経験があるものの、(JLPT)3級以下のレベルの学生だと判断された者)と中・上級レベルの学生6名(6人とも日本の滞在経験が1年以上で、日本語の学習経験が4年以上、さらに(JLPT)N1級を取得した者)である。12名とも出身地は全南と全北であり、初級者6名は音声教育は本格的に受けていないが、他の授業で本稿で扱っている音声項目について注意をしたことはある。中・上級者4名は音声教育²⁾を受けて、2名は受けている途中の学習者である。

2.2 調査方法

聴取材料を持ち、ランダムに配列させ同じ文を3回ずつ聞かせた。同じものを繰り返して聞かせたのは、より正確な資料を得るためである。それから自然な発音や同じ音声環境を作るため、簡単な文(「ここに～と書いてください。」)の形にして聴取の材料とし、調査を行った。聴取の材料は東京語話者で日本語教育に関わる女性に録音してもらったもので、学習者に聞かせて聴取の正確度を調査した。

2.3 聴取材料

△アクセント

さとう(佐藤(-3)) たなか(田中(0)) あおもり(青森(-3)) なかむら(中村(0))
 おおさか(大阪(0))
 ドア(door(-2)) ドラマ(drama(-3)) ピアノ(piano(0)) アイデア(idea(0))
 ブラウス(-3)

△特殊拍

/N/ 「ン」 →日本の 日本も 日本が 日本や 日本へ
 /Q/ 「ッ」 →きって(切手) コップ につき(日記) いったい いっぱい(가득)
 /R/ 「ー」 →きのう(昨日) とけい(時計) せんせい(先生) いもうと(妹)
 せいかつ(生活) スカート(skirt) おばあさん(お祖母さん)

2) 円光大学日本語教育学科、2年2学期にある[日本語音声教育]授業で週当たり3時間ある。

△母音の無声音化

おくさま(奥様) たくさん(沢山) ネクタイ(necktie) がくせい(学生) タクシー(taxi)

△～ン+ラ行

れんらく(連絡(0)) べんり(便利(-3)) さんるい(3 罌(-4))

ワンルーム(one-room mansion(-3)) ねんれい(年齢(0)) せんろ(線路(-3))

△「ザ行音」

ひざ(膝) ざっし(雑誌) かず(数) ズボン かぞく(家族) ぞうさん(像さん)

3. 調査結果

3.1 アクセントの聴取率³⁾

韓国人の日本語アクセントの知覚については李明姫・鮎沢・西沼(1995・1997)と助川・佐藤(1994)に詳しい。韓国人学習者の発話に現れているアクセントの傾向については拙稿(1999)、양나임(2010)、鄭樹漢(2010)など少なくない論考がある。これらの先行研究は、ほとんど和語や漢語中心の一般の名詞が調査の対象語となっている。

ここでは、よく間違いやすい固有名詞(地名と人名)と母語の干渉を受けやすい外来語アクセントの調査を行なった。窪蘭(2008)⁴⁾で指摘しているように東京語の名詞アクセントが主に平板型と-3型⁵⁾に収束しているのに韓国人の日本語学習者は母語の影響で-2の傾向⁶⁾が強い。このような傾向をなくすためには、アクセントの原則が平板型-3となっている固有名詞と外来語を取りあげてアクセントの感覚を習得させるのも一つのよい指導方案であろう。

韓国語では音節が発話単位であるため、外来語は特殊拍を含まない語つまり、韓国語音節数と日本語の拍数が一致している語を選び、初級者のため、答案にカタカナ語はひらがなをも併記した。アクセント型の表記はいろいろあるが、ここでは後ろから数える方法を採用し、平板型は「0」に表記した。

3) 聴取率とは聞き取りの正確度を意味する(以下同じ)。

4) 東京方言ではn音節の名詞にn+1個のアクセント型が存在すると言われているが、これは短い語にしかあてはまらないで、実際は平板型や後ろから3拍目にアクセントがある型(-3型)に収束していると指摘し、日本語教育の現場で平板型や-3型のアクセント感覚を習得させることの重要性を強調している。

5) 後ろから数えて3拍目にアクセントのある型で外来語アクセントと固有名詞アクセントではこのように後ろから数える方法が有効である。(以下-3と省略する)

6) 拙稿(1999)や鮎沢他(1995)、助川・佐藤(1994)などに指摘している。

＜表1＞ 固有名詞アクセント

対象者 標準語ア		初級者(S)						中上級者(K)					
		S1	S2	S3	S4	S5	S6	K1	K2	K3	K4	K5	K6
さとう (-3)	聴取	-3	0	-3	-3	0	0	-3	-3	-3	-3	-3	0
	発音	-2	-2	0	-2	-2	0	-3	-3	-3	-3	-3	-2
たなか (0)	聴取	0	-2	0	0	0	-2	0	0	0	0	0	0
	発音	-2	-2	0	-2	-2	0	0	-2	0	0	0	0
あおむら (-3)	聴取	-3	-2	0	-3	0	0	-3	-2	-3	-3	-2	-3
	発音	-2	-2	-3	-2	-3	-2	0	-3	0	-3	-2	-2
なかにし (0)	聴取	-3	0	0	-3	0	0	0	-2	0	-3	0	-2
	発音	-2	-2	0	-2	0	0	0	-2	0	-2	-2	-3
おおさか (0)	聴取	0	0	0	0	0	0	0	0	-3	0	0	0
	発音	-2	-4	-4	-2	0	-2	0	-4	-4	-4	-2	0

* 「0」は1拍目と2拍目が「高高」で同じ高さで発音される型を意味する(以下同じ)。

* 「テ」は1拍目と2拍目が「低低」同じ低さで発音される型を意味する(以下同じ)。

固有名詞アクセントの原則は0か-3⁷⁾である。拙書(2010)では日本人の名字ベスト200を調査の結果は0が118(59.0%)、-3が82⁸⁾(41%)で、平板型がやや多く現れているのに対して地名アクセントは1都1道2府43県と県庁名⁹⁾などは-3(82.0%)が圧倒的に多く調査された。

ここでは人名3つと地名2つ調査したが、学習者の発音の難易度調査(発音の正確度S26.7%、K43.3%)の時に比べ、聞取テストでは正確度が初級者(以下Sという)46.7%、中上級者(以下Kという)70.0%で、S・Kとも発音より聴取の正確度が高く調査され、聞取の場合もSよりKに正確度が高く現れている。またS・Kとも標準語アクセントで現れない型、高高現象¹⁰⁾がS6回、K3回現れ、発音の時より多く現れた。調査語の中で-2が一つもないのに関わらず、発音の場合S18回(60.0%)、K8回(26.7%)でSほど-2が目立っていたが、聴取の場合S3回、K4回でSKとも-2の傾向は顕著に減っている。

指導方案としては初級段階からアクセント教育をさせ、固有名詞アクセントは0と-3であることを強調し、発音指導のときは0と-3をペアにしてアクセントの訓練をさせる。このように、地

7) 2拍語の場合は0か-2である。後ろから3拍目に特殊拍などが来る場合は-4になる。例えば「仙台(センダイ)-4」北海道(ホッカイド)-4」などである。

8) 82のうち「安藤(アンドー)-4」「大橋(オーハシ)-4」「関(せき)-2」の3つも含まれている。

9) 県庁名では県名と違うもの17個を入れる。

10) 東京アクセントの特徴の一つは第1拍目と2拍目は必ず高低位置関係が異なることである、韓国人の学習者は母語の影響で1拍目と2拍目を同じ高さで発音する傾向がある。

名や人名のアクセントの練習は窪蘭(2008)が指摘しているように日本語の名詞アクセント全体の練習にもなるので、固有名詞アクセントの教育は肝要である。

<表2> 外来語アクセント

対象者 標準語ア		初級者(S)						中上級者(K)					
		S1	S2	S3	S4	S5	S6	K1	K2	K3	K4	K5	K6
ドア (-2)	聴取	0	0	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	0
	発音	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-2
ドラマ (-3)	聴取	-2	-3	-3	-3	-3	0	-3	-3	-3	-3	-3	-3
	発音	-2	-2	-2	-2	-2	-2	-3	-3	-3	-3	-3	-3
ピアノ (0)	聴取	-3	0	0	0	0	-2	0	0	0	0	0	0
	発音	-2	-2	-2	-2	-2	-2	0	-3	-3	-3	-3	-2
アイデア (0)	聴取	-3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-2
	発音	-2	-2	-2	-4	-2	-2	-3	-2	0	-2	-2	-4
ブラウス (-3)	聴取	-3	-2	0	-3	0	0	-3	-3	-3	-3	-2	0
	発音	-3	-2	-2	-3	-2	-3	-3	-3	-3	-3	-3	-2

韓国人の学習者は音節単位でアクセントを置く傾向¹¹⁾があるため、本稿では韓国語の音節の数と日本語の拍数が一致する語、つまり特殊拍¹²⁾を含まない語だけ調査の対象としたが、特殊拍が含まれると聴取の正確度は更に低くなると思われる。李明姫他(1999)¹³⁾の結果より正確度が高く調査されたのもこのような理由であろう。

<表2>と<表10>から分かるように外来語アクセントの聴取の正確度はS46.7%、K86.7%で、発音の正確度(S26.7%、K63.3%)よりSKとも高く調査された。2拍語はS・K全員、外来語アクセントの大原則¹⁴⁾通り発音していたが、聴取はS2名、K1名が原則からはずれた答をとっている。発音調査と同様にここでも、1拍目と2拍目を同じ高さ(高高・低低現象)で聞いている学習者がS10回、K2回調査された。このように日本語のレベルが低いほど聴取の正確度も低く、高高現象も多く現れている。日本語のレベルによって正確度の差があるの

11) 中藤(2001)ではソウル方言話者は特殊拍が含まれている日本語を発音するとき、音節単位で発音する傾向があると指摘している。

12) ここでは「ッ・ン・ー」音だけを指す。

13) この論文では特殊拍が入っている語も含んで調査している。

14) 外来語のアクセントの大原則は後ろから3拍目にアクセント核が置かれるが、和製英語や古くから日本語に入った語など、日常生活によく使われて日本語化されたものは、平板型になる傾向がある。また新しく入った語など、まだ外国語のにおいが強い語は原語アクセントをいかす傾向がある(NHK編(1999)『日本語発音辞典』付録参照)。

は当然なことであるが、アクセントの訓練の有無によっても差が出てくると思われる。

外来語は母語にも同一な語が存在していて、母語干渉を受けやすいので、外来語アクセントの大原則(-3)15)を強調し、4拍語の平板型とペアを作って発音指導や聞取練習をさせる。このように外来語を用いて訓練すると、語の長さやアクセント型の相関関係も同時に学習することができる。また、アクセントの原則は忘れる傾向があり、原則を知っていても実際の発音とのずれがあるので、日頃音声テープを繰り返して聞く習慣を身につけたほうが望ましい。

3.2 特殊拍の聴取率

関光準(1987)、戸田(2003)、李炯宰(1991・2010)、など数多くの論文で韓国人学習者の特殊拍の知覚と発音の困難さについて指摘している。韓国人学習者は特殊拍を短く発音する傾向があり、特に「ッ」と「一」は短く発音する場合は、意味上の問題を引き起こすので注意が必要である。韓国人には音節の感覚がなく、拍(mora)の感覚がないので、特殊拍の知覚と発音に習得困難な点が多いと言われている。

ここでは特殊拍「ン・ッ・一」の含まれている語を調査の対象語として聞取テストを行い、聴取の難易度を調べ、今後の指導上の手がかりとしたい。

3.2.1 撥音/N/

<表3> 「ン」の発音

対象者 「ン」発音	初級者(S)						中上級者(K)						
	S1	S2	S3	S4	S5	S6	K1	K2	K3	K4	K5	K6	
日本の [n]	聴取	m	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n
	発音	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n
日本も [m]	聴取	m	n	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
	発音	m	m	m	m	m	ŋ	m	m	m	m	m	m
日本が [ŋ]	聴取	ŋ	ŋ	ʃ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ
	発音	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	m	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ
日本や [ʃ]	聴取	ʃ	ŋ	ʃ	ŋ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ
	発音	ŋ	ŋ	ŋ	n	ŋ	ŋ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ŋ
日本へ [ʃ]	聴取	ʃ	ŋ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ
	発音	One	One	One	ʃ	One	One	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ	ʃ

* ○印は「ン」のところが発音されていないことを表す。

15) 柴田武(1994)・窪菌(2006)などでは外来語(カタカナ語)の90%はピッチが落ちる型(起伏式)であるが、そのほとんどは-3型(ワシントン(-4)・バイナップル(-4)等のように-3拍目に特殊拍が来てアクセント核が1拍前にずれた型も含まれる)で、残り10%は平板型(アメリカ・スタミナ・ステレオ・スタジオ等)であるが、これは4拍語に集中していると述べている。

撥音「ン」は後続音によっていくつかの異音で現れるため、初級者にとっては自立拍に比べて発音や聴取において習得困難な発音の一つに違いない。ところが「ッ」や「一」に比べ聴取の正確度がS・Kとも高くそれぞれ80.0%、96.7%で調査された。特に「ン」の次に歯茎音[n]、両唇音[m]、軟口蓋音[ŋ]が来た場合は聴取の正確度は高くS83.3%、Kは100%で現れた。これに対して「ン」の次に半母音や母音[e]が来たとき、発音の場合はS8.3%、K91.7%で現れ、初級者は鼻母音の発音が非常に困難で、「日本や」は[jihonja]で、「日本へ」は「ニホネ[jihone]」発音している学習者がそれぞれ6人のうち5人もいた。聞き取りにおいてはS70.0%、K100%で現れ、初級者がかなりよくなっているが、やはり学習者の日本語のレベルによって発音、聴取とも正確度の差が見られた。

このような現象が起きている理由は、初級者は特に「ン」を短く発音・知覚しており、さらに初級段階では「ン」を主に[n]、[m]、[ŋ]など3つぐらい分けて発音指導を行ない、「ン」の後続音が母音・半母音の発音つまり、鼻母音についてはあまり認識させないからであろう。自然な鼻母音の発音や聴取のためには、初級段階から鼻母音の発音や音節と拍の区別に留意させ、「ン」の次に切れ目をおいたり、特殊拍「ン」も1拍の長さを持っていることを強調して発音と聞き取り練習を行う。

3.2.2 促音/Q/

<表4> 「ッ」の発音

対象者 「ッ」発音		初級者(S)						中上級者(K)					
		S1	S2	S3	S4	S5	S6	K1	K2	K3	K4	K5	K6
きて (0)	聴取	ッ	×	ッ	ッ	ッ	×	ッ	ッ	ッ	×	ッ	ッ
	発音	ッ	×	ッ	ッ	×	×	ッ	ッ	ッ	×	ッ	×
コップ (0)	聴取	ッ	×	ッ	×	×	×	ッ	ッ	×	ッ	ッ	×
	発音	×	×	×	×	×	×	ッ	ッ	ッ	×	ッ	×
につき (0)	聴取	ッ	ッ	×	ッ	×	×	ッ	ッ	ッ	×	ッ	ッ
	発音	×	ッ	×	ッ	×	×	ッ	×	ッ	×	ッ	×
いづい (0)	聴取	×	ッ	×	×	ッ	×	ッ	ッ	ッ	×	ッ	×
	発音	ッ	×	ッ	×	×	×	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	×
いづい (0)	聴取	ッ	×	ッ	ッ	×	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ
	発音	ッ	×	ッ	×	×	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ	ッ

拙稿(2010)では、音声項目8つの中で外来語アクセントの次に促音が発音の難易度の面で高いことが調査された。もちろん特殊拍のなかでは一番習得困難な項目で分析され

た。関光準(1987)でも韓国人学習者の促音の知覚において拍の持続時間を手がかりにすることが非常に困難であることを指摘している。このように韓国人学習者は促音の知覚や発音に困難な点を持っているのにも関わらず、促音を含んでいない語に促音挿入現象も起こるということを関光準(2000)で述べている。なにしろ、韓国人学習者にとっては促音は非常に難しい発音に違いない。

ここでは、促音の入っている語だけ調査したが、前回の発音調査では正確度が S33.3%、K73.3%で現れたが、今回の聴取の正確度はS50.0%、K80.0%で分析された。このようにS・Kとも発音より聞き取りのほうが正確度がやや高かった。日本語のレベルが高いほど発音や聴取の正確度も高く調査された。今回の調査には入れなかったが、ミニマル・ペア¹⁶⁾で聴取テストを行なった場合はSKとも正解度は100%であった。

促音は十分、1拍の長さで認識していないと、意味上の問題を起こしやすいので促音のある語とない語をミニマル・ペアを作って発音指導や聞き取り練習をさせれば、その効果は大きいと思われる。

3.2.3 長母音/R/

<表5> 「一」の発音

対象者 「一」発音		初級者(S)						中上級者(K)					
		S1	S2	S3	S4	S5	S6	K1	K2	K3	K4	K5	K6
きのう [kino:]	聴取	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	発音	—	×	—	ウ	—	×	—	×	—	×	—	—
どけい [toke:]	聴取	—	—	—	×	—	×	—	—	エ	—	—	—
	発音	×	イ	—	イ	イ	イ	—	—	—	イ	—	イ
せんせい [seŋse:]	聴取	—	エ	×	—	×	エ	—	—	—	エ	—	×
	発音	—	—	×	イ	イ	イ	—	—	×	—	×	—
いもうと [imo:to]	聴取	—	—	—	—	—	オ	—	—	—	—	—	—
	発音	—	—	—	—	—	ウ	—	—	—	—	—	—
せいかつ [se:katsu]	聴取	×	—	—	エ	—	×	—	—	—	×	—	エ
	発音	イ	イ	—	イ	イ	イ	—	—	—	—	—	イ
スカート [suka:to]	聴取	—	×	—	ツ	—	×	—	—	—	—	—	ツ
	発音	—	—	—	ツ	—	ツ	—	—	—	—	—	ツ
おばあさん [oba:saŋ]	聴取	×	—	—	—	—	×	—	—	—	—	—	—
	発音	×	—	×	—	×	×	—	—	×	—	—	×

※[:]は長母音記号「一」に当たる発音記号である。

※「×」は長母音の部分が発音していないことを現わす。

16) 例えば「きて(来て)0/きって(切手)0」「いて(居て)0/いって(行って)0」「スパイ(spy)-2/すっぱい(酸っぱい)-2」など同じアクセントで、促音を含む語と含まない語をペアにして聞き取りテストを試みた。

韓国人学習者の長母音の習得と特徴については李炯宰(1997・1998・2010)¹⁷⁾に詳しい。本稿では長母音の聴取の正確度を調査したが、S64.3%・K85.7%で、発音調査(S42.9%・K76.2%)より高く現れた。長母音のところの発音ではS・Kとも「イ」が多く現れたが、聴取では「イ」が1つも現れず、「エ・ッ・×」に聞え、難易度を高めている。

「きのう(昨日)・いもうと(妹)」のように[o+ɯ]が[o:]に聞こえた学習者はS・Kとも正確度(K11/12¹⁸⁾、S12/12)が高く調査された。これに対して「とけい(時計)・せんせい(先生)」のように語末の[e+i]が[e:]に聞こえたのはS6/12、K9/12で正確度の差が見られた。語中の[e+i]の例「せいかつ(生活)」は発音調査ではSは長母音で発音せず、5/6名が「イ」で調査された。これに対して聴取調査ではS3/6名、K4/6名が、正確に聞き取りをしていて、残りは長母音化せず、[seekatsɯ][sekatsɯ]に聴取していた。

「スカート」は発音調査ではS・K9/12名が正確な発音で、残り3名は長母音のところに促音を入れて発音されていたが、聴取ではS・K8/12名で発音より困難であることになる。「おばあさん」は発音の場合S・K6/12名(50.0%)で正確度が低かったが、聴取はS・K10/12名(83.3%)で現れ、発音より聴取の正確度が高く調査された。「おばさん」とミニマル・ペアを作って聞取テストを行なった結果、正確度はそS・Kとも100%で調査され、長母音の聞取訓練も促音と同様にミニマル・ペアで実施するのが効果的であることが分かった。

聞取テスト¹⁹⁾では語末の[o+ɯ]<語中の[o+ɯ]<語中の[a+a]<語中の/R/<語中の[e+i]<語末の[e+i]などの順で現れ、語中・語末の[o:]は一番正確度が高く、語末の[e:]²⁰⁾は発音・聴取とも難易度が一番高く調査されたので、長母音を指導する際、この順を参考にして、/R/を含む語と含まない語でミニマル・ペアを作って、/R/も1拍の長さをもっていることを強調する。

17) 1997年の論文は日本語学習者の日本語長母音習得に関する横断的研究で、1998年は日本語長母音に見られる個人的特徴を考察した論文である。2010年の論文では中級学習者の特殊拍の持続時間の配置の特徴を中心に述べている。

18) (6人×2語=12)を指している。(以下同じ)

19) 発音調査では語中の[o+ɯ]<語末の[o+ɯ]<語中の/R/<語中の[e+i]<語中の[a+a]<語末の[e+i]などの順で、語中の[o:]は一番正確度が高く、語末の[e:]は正確度が一番低く調査された。

20) 李炯宰(2010)でも語中より語末の長母音の発音が困難であることが分析されている。ここでも語末の長母音の正確度はS33.3%、K66.7%、語中の長母音はS50.0%、K83.3%でやはり語末の長母音の発音が困難であることが調査された。

3.3 母音の無声化の聴取率

〈表6〉 母音の無声化

対象者 母音の無声化		初級者(S)						中上級者(K)					
		S1	S2	S3	S4	S5	S6	K1	K2	K3	K4	K5	K6
おさま(-4) [okusama]	聴取	○ -4	○ -4	ツ -4	○ -3	○ -3	ツ -2	○ -4	○ -4	○ -4	○ -4	○ -4	× -0
	発音	○ -4	○ -4	× -3	○ 0	× -3	× -3	○ -4	○ -4	○ -4	○ -4	○ -4	× 0
たぐさん(0) [takusān]	聴取	○ -0	○ -0	○ 0	× -3	ツ 0	○ 0	○ 0	○ 0	○ 0	○ 0	○ 0	○ 0
	発音	○ 0	○ 0	○ -0	× -3	× -3	○ -0	○ 0	○ 0	○ 0	○ 0	○ 0	× -3
ネクタイ(-4) [nekutai]	聴取	○ -4	○ -4	× -3	○ -2	× -2	ツ -3	○ -4	○ -4	○ -4	ツ -3	○ -4	ツ -2
	発音	○ -4	× -3	× -2	× -3	× -2	× -2	× -2	○ -4	○ -4	× -3	○ -4	× -3
かぐせ(0) [gakuse:]	聴取	○ 0	○ -0	ツ -3	○ 0	○ -2	ツ -2	○ 0	○ 0	○ 0	○ 0	○ 0	○ -0
	発音	○ 0	○ -0	× -3	× -3	× -2	× -2	○ 0	○ 0	○ 0	○ -2	○ 0	○ 0
タケ(=-4) [take:]	聴取	○ -4	× -3	ツ -4	○ -3	× -3	ツ -0	○ -4	○ -4	○ -4	○ -3	○ -4	ツ -0
	発音	× -4	○ -4	× -3	× -3	× -2	× -2	○ -4	× -4	○ -4	× -3	○ -4	× -3

※ 「たぐさん」の「-0」は1拍目から4拍目まで高い型「たぐさん(高高高高)」を表す(以下、同じ)。
[w]の下にある「○」母音の無声化を表わす。

日頃、学習者の日本語のレベルが低いほど母音の無声化現象の発音が不自然で、そのうえ、アクセントもおかしくなっていることに気づかれた。日本語の「母音の無声化²¹⁾」はいくつかの環境²²⁾で起こるが、本稿では初級者を考慮して、無声子音と無声子音の間の「ク」の母音[w]の無声化だけ調査の対象とした。無声化する拍にはアクセント核が置かれられない傾向²³⁾がある。このように「母音の無声化」とアクセントとは関わりがあるので、ア

21) 共通語では、たとえば、「菊」という語を、自然に発音すると、[kiku]のように、[ki]の母音を、口構えだけのこして、声帯を振動させず、息だけで発音する現象がみられる。これを「母音の無声化」という(NHK編(1999)『日本語発音アクセント辞典』付録参照、pp.227-228)。

22) (1)母音「イ、ウ」が無声子音と無声子音の間に挟まれたとき無声化する。(2)「イ、ウ」の次に促音がある場合にも無声化が起こる。(3)語末、文末が無声子音+「イ、ウ」で終わる場合、さらに高いアクセントで発音されない場合には無声化する。(4)無声子音の間の「ア、オ」も無声化になる場合があるが、主に同じ母音が続けられるとき、無声子音の間で起こる場合が多い(NHK編(1999)付録、拙書(2010)参照)。

クセントの傾向も検討してみた。

発音調査では「母音の無声化」の正確度はS36.7%、K73.3%で、アクセントの正確度もS21.7%、K53.3%で現れ、初級者ほどアクセントのばらつきが大きくて、高高現象も目立っていた。聴取の判断では正確度はS56.7%、K86.7%で、アクセントの正確度はS46.7%、K78.4%で調査され、初級者にはやはり「母音の無声化」やアクセント(母音の無声化が起きている語)の聞取判断は非常に困難であることが分かった。

そこで、「母音の無声化」の発音指導や聞取練習においてはアクセントにも留意して指導すべきである。

3.4 「～ン+ラ行音」聴取率

<表8> ～ン+ラ行音

～ン+ラ行		対象者		初級者(S)						中上級者(K)					
		S1	S2	S3	S4	S5	S6	K1	K2	K3	K4	K5	K6		
れんらく [nr]	聴取	nr	rr	rr	nr	nr	nn	nr	nr	nr	nr	nr	rr		
	発音	nn	rr	rr	nn	rr	rr	nr	nr	rr	nn	nr	rr		
べんり [nr]	聴取	nr	nn	nn	nn	nr	nn	nr	nr	nr	nr	nr	nn		
	発音	nn	rr	nn	nr	nn	nr	nr	nr	nr	nr	nr	nn		
さんるい [nr]	聴取	nr	nn	nr	nr	nr	nn	nr	nr	nr	nn	nr	nn		
	発音	nr	nn	nr	nr	nn	nn	nr	nr	nr	nn	nr	nn		
ワルーム [nr]	聴取	nr	nr	nr	nr	nr	nr	nr	nr	nr	nr	nr	nr		
	発音	nr	nr	nr	nr	nr	nn	nr	nr	nr	nr	nr	nr		
ねんれい [nr]	聴取	nr	nn	nr	nr	nn	nn	nr	nr	nn	nr	nr	nn		
	発音	nr	nn	nn	nn	nn	nn	nr	nr	nn	nn	nr	nn		
せんろ [nr]	聴取	nr	nr	nr	nn	rr	nn	nr	nr	nr	rr	nr	nn		
	発音	nn	nn	rr	nn	rr	nn	nr	nr	nn	rr	nr	nn		

※ 「ン」と「ラ行」音の異音は全部表わさないで、ここでは「ン」は[n]、「ラ行」は[r]で表記した。

韓国人学習者は母語の影響でよく「連絡(レンラク)[renrakw]」を[rerrakw](렐라쿠)と発音したり、聞いたりする。このように「～ン+ラ行」音は韓国人学習者にとっては、かなり習得困難な音声項目であることに間違いない。ところが、これまで先行研究はいまだに管見に入っていない。こういうことが今回の調査のきっかけとなった。

「ン」の後続音として「ら・り・る・れ・ろ」を含む語を調査の対象語にしたが、発音

23)母音の無声化する拍には高さの切れ目が置きにくい。そのため、アクセントの高さの切れ目がそこにくると、原則として1拍前後にずれる(NHK編(1999)『日本語発音アクセント辞典』付録参照、p.219)。ただ「母音の無声化」が続く場合にはアクセントが置かれる例もあれば、1拍後ろにずれる例もある。(拙稿(1995)に詳しい。)

の正確度はS30.6%、K66.7%で現れていたのに対して、聴取の正確度はS58.3%、K77.8%で調査された。これまでの音声項目と同様に発音より聴取のほうが正確度が高く、また学習レベルが低いほど正確度も低かった。

「～ん＋ら行」の正しい発音は[nr̥]であるが、学習者の発音や聞取判断では[nr̥]、[rr̥]、[nn]に3つのパターンに現れた。「れんらく・べんり・せんろ」の発音では[rr̥]10回、聞取判断でも[rr̥]5回で現れた。これは母語干渉(「連絡[열락]、便利[펼리]、線路[설로]」などに発音されること)の影響が考えられる。

このように、「～ん＋ら行」は習得困難な音声項目であるが、外来語である「ワンルーム」は発音の正確度はS83.3%、K100%で、聴取の正確度はS・Kとも100%で調査され、漢語に比べ正確度が顕著に高かった。「～ん＋ら行」音は発音練習や聞取練習においては最初は「ワンルーム、オンライン」など複合語的な外来語を導入させ、段々漢語を採り入れる方法が効果的であろう。

5. 「ザ行音」の聴取率

〈表9〉ザ行音

対象者 ザ行音	初級者(S)						中上級者(K)					
	S1	S2	S3	S4	S5	S6	K1	K2	K3	K4	K5	K6
ひざ	聴取	ザ	ザ	ジャ	ジャ	ザ	ザ	ザ	ザ	ザ	ザ	ジャ
	発音	ザ	ザ	ザ	ジャ	ザ	ジャ	ザ	ザ	ザ	ザ	ザ
ざし	聴取	ジャ	ザ	ザ	ジャ	ザ	ジャ	ザ	ザ	ザ	ジャ	ジャ
	発音	ザ	ザ	ジャ	ジャ	ザ	ジャ	ザ	ジャ	ザ	ザ	ジャ
かざ	聴取	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ
	発音	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ
ズボン	聴取	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ジュ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ
	発音	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ	ジュ	ズ	ズ	ズ	ズ	ズ
かぞく	聴取	ゾ	ゾ	ジョ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ	ジョ
	発音	ゾ	ゾ	ジョ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ	ゾ
ぞうさん	聴取	ジョ	ジョ	ジョ	ジョ	ゾ	ジョ	ゾ	ジョ	ゾ	ジョ	ゾ
	発音	ゾ	ゾ	ジョ	ゾ	ジョ	ジョ	ゾ	ゾ	ゾ	ジョ	ゾ

韓国人学習者の「ザ行音」については戸田(2008)は母語干渉による問題点として報告し、李炯宰(1991)²⁴⁾は難易度の高い音声項目の一つとして指摘し、許舜貞(2008)²⁵⁾は

24)韓国人初級・中級学習者に発音と聞取テストを行ない、発音の難易度の調査を行ない、ザ行音は難易度の高い発音だが、特に語頭の「ゾ」が最も難易度が高いという結果が出ている。

上級者の「ザ行音」の習得状況を調査し、報告している。

本稿では初級と中上級学習者を対象として「ザ・ズ・ゾ」が語頭と語中または語末に来る場合、聴取の難易度を調査した。全体の正確度は発音ではS72.2%、K80.9%で、聴取ではS66.7%、K80.6%で現れ、他の音声項目に比べ、SとKの間に正確度の差はそれほど大きくなかった。また、これまで検討された音声項目は全部聞取りより発音のほうが難易度が高かったが、「ザ行音」では逆転現象が起きている。聴取では語頭(61.1%)、語中(83.3%)、語末(91.7%)、の順で現れ、語頭の「ザ行音」特に「ぞうさん」のように語頭の「ゾ」が最も聞きにくい発音と調査²⁶⁾され、李炯宰(1991)の結果を裏付けている。指導する際は、こういう点に留意して発音練習を行なうべきである。

初級者にとっては拗音が入っている語が習得困難であるはずなのに、「ザ行音」に関しては「ザ・ズ・ゾ」を「ジャ・ジュ・ジョ」に発音したり、聞いたりする原因は韓国語には「ザ行音」子音/z/がない音素であり、「ス(ㅍ)・入(ㅃ)・テ」系列の音と日本語の「ジャ・ジュ・ジョ」音は調音点が同じ歯茎硬口蓋音であるからだろう。

4. 発音の難易度

<表10>に聴取の正確度を音声項目別にまとめてみた(参考に()の中の数字は拙稿(2010)の発音調査の結果を記載しておいた)が、<図1>と<図2>にグラフでS・Kとの聴取の正確度を比べておいた。聞取りにおいて難易度の高い順で、S・Kの平均アクセント62.6%(37.6%²⁷⁾)、ン+ラ行音68.1%(48.7%)、母音の無声化71.7%(55.0%)、ザ行音73.7%(76.6%)、特殊拍76.2%(63.4%)の順で現れ、発音調査の結果とは若干の差がみられた。これはザ行音以外の音声項目は発音より聞取りのほうが難易度が低かったが、ザ行音においては逆転現象が起きて、S・Kとも発音より聞取りがやや難易度が高く調査されてこのような結果が出ていると思われる。特殊拍が発音と聴取の判断で難易度が低く現れている理由は「促音・長母音」に比べ「撥音」はS・Kとも一番正確度が高く現れているからである。これらのS・K平均は促音65.0%(53.3%)、長母音75.0%(59.6%)、撥音88.4%(76.7%)の順で、特殊拍の中ではS・Kとも促音が発音と聴取の難易度が最も高く

25)韓国語を母語とする上級日本語学習者を対象に「ザ行音」の習得状況について調査を行なった結果、上級者においてはいい誤りはほとんど残っていないが、韓国語母語話者にとって全く問題のない「ジャ行音」を「ザ行音」で発音するという逆転現象が一部の上級者に起きていることが明らかになったと指摘している。

26)発音調査では語頭(69.5%)、語末(87.5%)、語中(94.5%)の順で現れ、語頭の「ザ行音」が発音困難な項目となっている。「ザ・ズ・ゾ」では「ザ」と「ゾ」は同様に「ズ」の正確度が最も高く調査された。

27)()の中の数字は発音調査の結果である(以下、同じである)。

調査された。

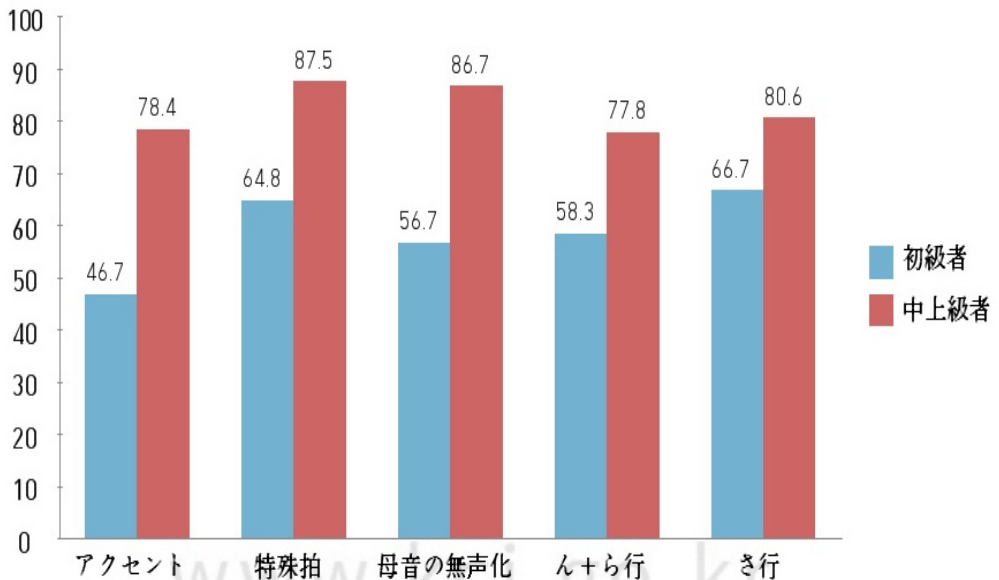
S・Kとも聞取、発音の難易度が最も高い音声項目はアクセントであり、学習レベルと難易度の差があまりない音声項目は「ザ行音」であった。

<表10> 聴取の正確度

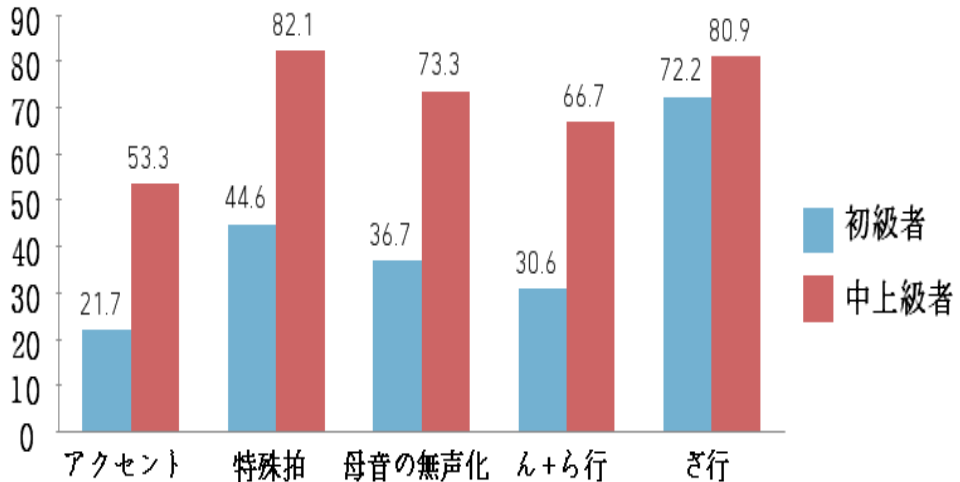
音声項目 対象者	アクセント		特殊拍			母音の 無声化	ん+ら行	ざ行
	固有語	外来語	ン	ッ	ー			
初級者 (S)	46.7%	46.7%	80.0%	50.0%	64.3%	56.7%	58.3%	66.7%
	(16.7%)	(26.7%)	(56.7%)	(33.3%)	(42.9%)			
	平均46.7%		平均64.8%					
	(21.7%)		(44.6%)					
中上級者 (K)	70.0%	86.7%	96.7%	80.0%	85.7%	86.7%	77.8%	80.6%
	(43.3%)	(63.3%)	(96.7%)	(73.3%)	(76.2%)			
	平均78.4%		平均87.5%					
	(53.3%)		(82.1%)					
S・K平均	62.6%		76.2%			71.7%	68.1%	73.7%
	(37.6%)		(63.4%)			(55.0%)	(48.7%)	(76.6%)

※ 濃く示している割合は聴取の正確度を表しており、()の中は発音の正確度を表している。

<図1> 聴取の正確度



<図2> 発音の正確度



※<図2>は拙稿(2010)の発音の正確度の図を参照した。

5. おわりに

本稿では習得困難であると思われる日本語の音声項目について聞取の難易度を調査し、前回の発音調査の難易度と比較しながら分析・検討してみたが、次のような結果が得られた。

第1は、聞取において難易度の高い順で、S・Kの平均アクセント62.6%、ン+ラ行音68.1%、母音の無声化71.7%、ザ行音73.7%(発音76.6%)、特殊拍76.2%の順で現れ、発音調査の結果とは若干の差がみられた。

第2は、S・Kとも聞取、発音の難易度が最も高い音声項目はアクセントであり、学習レベルと難易度の差があまりない音声項目は「ザ行音」であった。

第3は、日本語のレベルが高いほど聴取や発音の難易度が低かったが、アクセントの面で高高現象や-2の傾向は日本語のレベルとはそれほど関係なく現れた。

第4は、特殊拍が発音と聴取の判断で難易度が低く現れているのは「促音・長母音」に比べ「撥音」はS・Kとも一番正確度が高くなっているからである。特殊拍の中ではS・Kとも促音が発音と聴取の難易度が最も高く調査された。

第5は、聴取では語中・語末の[o:]が一番難易度が低く、語末の[e:]は発音・

聴取とも難易度が一番高く調査された。長母音のところの発音ではS・Kとも「イ」が多く現れたが、聴取では「イ」が1つも現れず、「エ・ッ・×」に聞え、難易度を高めている。

第6は、「母音の無声化」の聴取の正確度はS56.7%、K86.7%で、アクセントの正確度はS40.0%、K80.0%で調査され、初級者にはアクセントのばらつきも大きく「母音の無声化」の発音だけでなく、聞取判断も非常に困難であることが分かった。

第7は、「～ん+ら行」の正しい発音は[nr]であるが、学習者の発音や聞取判断では[nr]、[rr]、[nn]に3つのパターンに現れた。[rr]で発音したり、聞こえたりしたのは母語干渉(「連絡[열락]、便利[펼리]、線路[설로]」などに発音されること)の影響が考えられる。

第8は、発音、聴取において「ザ・ズ・ゾ」が「ジャ・ジュ・ジョ」になる傾向がみられたが、韓国語の「ㅈ、ㅉ、ㅊ」と日本語の「ジャ行音」は調音点が同じ歯茎硬口蓋音であるためである。「ザ行音」の聴取では語頭(61.1%)、語中(83.3%)、語末(91.7%)、の順で現れ、語頭の「ザ行音」特に「ぞうさん」のように語頭の「ゾ」が最も聞きにくい発音と調査され、先行研究の結果を裏付けている。

本稿では、日本語の音声の聞取の難易度を調べることに当たって、数多くの音声項目を取り扱って調査を行なったため、調査語や対象者の不足で、厳密な調査が行なわれなかった点があると思われる。また音声項目によっては無意味語で調査を行なったほうがより正確なデータが得られる項目もあると思われる。

今後以上の点に留意してもっと厳密な研究が必要となる。特に「母音の無声化」とアクセントの関わりや「～ん+ら行音」についてはもう少し多様な角度からの研究が課題として残されている。

【参考文献】

- 関光準(1987)「韓国人の日本語の促音の知覚について」『日本語教育』62号, pp.179-193.
- _____ (2000)「한국인 학습자의 일본어 발음에 나타나는 축음 삽입 현상」『日本文化学報』第9輯, 한국일본문화학회, pp.75-92.
- 양나임(2010)「한국어 무악센트 방언화자의 일본어 악센트 고찰 -서울방언화자와 광주방언화자를 대상으로-」『日本語教育』第53輯, 한국일본어교육학회, pp.23-39
- 李明姬·鮎沢孝子·西沼行博(1995)「韓国人学習者の東京語アクセントの知覚-釜山地方の場合-」『日語日文学4』大韓日語日文学会, pp.87-98
- _____ (1997)「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本語学報』第38輯, 韓国日本学会, pp.87-98
- 李明姬·金世連·李芬雨(1999)『日本語の学習者のアクセントテスト(和語、外来語、漢語)の結果について』新羅大学校論文集第48輯(師範大学篇), pp.333-342
- 李香蘭(1995)『日本語における外来語アクセントの研究』博士論文、東北大学文学研究科
- _____ (1999)「한국인 일본어 학습자의 일본어 악센트 학습효과」『日本文化学報』第7輯, 한국일본문화학회, pp.101-121
- _____ (2010)『日本語音声教育』어문학사, pp.1-210
- _____ (2010)「韓国人学習者の日本語発音の難易度調査と指導方案 -初級学習者と中上級学習者の発音現象を中心に-」『日本語教育』54輯, 韓国日本語教育学会, pp.13-24
- 李炯宰(1991)「韓国人日本語学習者の音声教育に関する研究-発音および聞き取り上の問題点を中心に-」『日本語と日本文学』12, 筑波大学国語国文学会 pp.63-79
- _____ (1997)「중급학습자 일본어학습자의 일본어 장모음 습득에 관한 횡단적 연구」Foreign Language Education 3-2, pp.175-190
- _____ (1998)「日本語長母音に見られる個人的特徴の考察」『日本語文学』第6輯, 韓国日本語文学会, pp.185-206
- _____ (2010)「한국인 중급학습자의 일본어 특수막 발음 분석 -지속시간 배치의 특징을 중심으로-」『日本語教育』第53輯, 한국일본어교육학회, pp.41-56
- 鄭樹漢(2010)「韓國語大邱方言話者の発話にみられる日本語アクセント特徴」『日本文化学報』第45輯, 韓国日本文化学会, pp.67-86
- 許舜貞(2008)「韓國語を母語とする上級日本語学習者によるザ行音の習得」『日本語教育と音声』くろしお出版, pp.163-182

- 窪菌晴夫(2006)『アクセントの法則』岩波科学ライブラリー118, 岩波書店
- _____ (2008)「プロソディーの基礎研究と日本語教育」『日本語教育と音声』くろしお出版, pp.101-116
- 柴田武(1994)「外来語のアクセントの核の位置」『現代語・方言の研究』明治書院, pp.388-418
- 助川泰彦・佐藤慈(1994)「韓国入学習者の日本語アクセント知覚における音節構造の影響」『東北大学留学生センター紀要』第2号, pp.27-32
- 戸田貴子(2003)「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』第7巻第2号, pp.70-83
- _____ (2008)「日本語学習者の音声に関する問題点」『日本語教育と音声』くろしお出版, pp.3-21
- _____ (2008)「日本語音声の研究と教育における課題」『日本語教育と音声』くろしお出版, pp.23-41
- 中東靖恵(1998)「日本語母語話者の英語音声と日本語音声 - 聞き取りと発音調査の結果から-」『音声研究』2-1, 日本音声学会, pp.72-82
- _____ (2001)「単語読み上げにおける韓国入日本語学習者のピッチ実現」『日本語教育』110号, 日本語教育学会, pp.80-89
- NHK編(1999)『日本語発音アクセント辞典』NHK出版

※本稿は拙稿(2010)「韓国入学習者の日本語発音の難易度調査と指導方案 - 初級学習者と中上級学習者の発音現象を中心に-」『日本語教育』54輯, 韓国日本語教育学会に掲載している論文の結果(発音調査)と今回の聞き取り調査を比較しながら分析・検討した。

要 旨

本稿では初級者と中上級者を対象として習得困難であると思われる「アクセント(固有名詞、外来語)」「特殊拍(ン、ッ、一)」「母音の無声化」「～ン+ラ行音」「ザ行音」などの日本語の音声項目について聞き取り調査を行ない、拙稿(2010)の発音調査の難易度と比較しながら分析・検討した。

第1は、聞き取りの難易度の高い順はアクセント、ン+ラ行音、母音の無声化、ザ行音、特殊拍で現れ、発音調査の結果とは若干の差がみられた。

第2は、S・Kとも聞き取り、発音の難易度が最も高い音声項目はアクセントであり、学習レベルと難易度の差があまりない音声項目は「ザ行音」であった。

第3は、日本語のレベルが高いほど聴取や発音の難易度が低かったが、アクセントの面で高高現象や-2の傾向は日本語のレベルとはそれほど関係なく現れた。

第4は、特殊拍の中ではS・Kとも促音が聴取の難易度が最も高く調査された。

第5は、聴取では語中・語末の[o:]が一番難易度が低く、語末の[e:]は発音・聴取とも難易度が一番高く調査された。

第6は、「母音の無声化」は聞き取り判断も非常に困難で、アクセントとも関わりがあって、初級者にはアクセントのばらつきも大きかった。

第7は、「～ン+ラ行」の正しい発音は[nɾ]であるが、学習者の発音や聞き取り判断では[nɾ]、[ɾɾ]、[nn]に3つのパターンに現れた。[ɾɾ]で発音したり、聞こえたりしたのは母語干渉(「連絡[열락]、便利[필리]、線路[설로]」などに発音されること)の影響が考えられる。

第8は、発音、聴取において「ザ・ズ・ゾ」が「ジャ・ジュ・ジョ」になる傾向がみられたが、韓国語の「스、ㅍ、ㅌ」と日本語の「ジャ行音」は調音点が同じ歯茎硬口蓋音であるためである。「ザ行音」の聴取では語頭、語中、語末の順で現れ、語頭の「ザ行音」特に「ぞうさん」のように語頭の「ゾ」が最も聞きにくい発音と調査され、先行研究の結果を裏付けている。

キーワード：アクセント、高高現象、特殊拍、母語干渉、母音の無声化、ン+ラ行音、ザとジャ行音

투 고 : 2010. 11. 30
1차 심사 : 2010. 12. 11
2차 심사 : 2011. 1. 08